「アダム・スミスの価値尺度論」に関連する V.W.ブレイドゥンの所論(1975年)〔I〕

——「アダム・スミスの価値尺度論」についての海外における諸研究(18):1970年代(その7)——

中　川　栄　治

序

わたくしは，主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関係する諸研究を整理する試みの一環として，本誌第4巻第1，第2，第3，第4号において，それぞれ，19世紀末から1910年代，1920年代，1930年代，1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを，本誌第5巻第2および第3号において1950年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを，また，本誌第6巻第1，第2，第3，第4号および第7巻第2号において1960年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みを，なし，そしてそれにつづいて，本誌第9巻第1，第3号および第10巻第1，第2，第3，第4号では1970年代に発表されたいくつかの個々の研究の内容を整理しようとしてきた。

本稿は，前六稿にひきつづき，1970年代に海外において発表されかつわたくしがみることのできた個々の研究の内容を整理する試みの一部として，もともとは1975年に公表されたV.W.ブレイドゥン (V.W. Bladen) の一論文のなかで示されている「アダム・スミスの価値尺度論」に関連をもつブレイドゥンの所論の内容を整理しようとするものである。

なお，本誌においてわたくしに割り当てられている紙面の関係上，そのブレイドゥンの所論の内容の整理の試みは，〔Ⅰ〕と〔Ⅱ〕という形で，本稿と次稿の2回に分けて行われる。

V.W.ブレイドゥン(1975)[1]——〔Ⅰ〕——

もともとは1975年に公表された一論文においてブレイドゥンは，アダム・スミス(Adam Smith)による「労働にたいする支配力」('command over labour')という概念の用法に関連するみずからの解釈，およびそれと対照させての他の諸論者の諸解釈に関して，つぎのような議論を展開している。

Ⅰ〔まず，ブレイドゥンは，他の諸論者による諸解釈を取り上げるにさきだって，スミスの議論における「労働にたいする支配力」という概念に関連するみずからの基本的な理解をつぎのような形で示そうとする。〕

①　スミスさらに経済学の古典期の終わりのマルクス(K. Marx)を含めて一般に古典派の経済学者は，経済プロセスを人々が仕事をしているとともに他人の仕事(work)を支配しているプロセスとしてみていたのであり[2]，そして，人は「自分が支配できるその労働〔すなわち，他の人々の労働〕の量におうじて，富んでいたり貧しかったりするにちがいない」というスミスの文言（Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations,* edited...by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library〈New York: Random House, 1937〉——以下，*W. N.* と略記する——, p. 30. 大河内一男監訳『国富論』〈全3巻〉，中央公論社，1976年——以下，大河内訳と略記する，ただし，本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない，また，本稿で取り扱われるすでに邦訳の出版されている他の文献からの引用文の訳についても同様——，〈Ⅰ〉，52ページ。〔　〕内はブレイドゥン。）は，こういった脈絡のなかで考えられなければならないのである[3]。

②　また，うえのスミスの文言は，それに「およびその労働の生産性におうじて」という言葉を加えて，人は「自分が支配できるその労働〔すな

わち，他の人々の労働〕の量におうじて，およびその労働の生産性におうじて，富んでいたり貧しかったりするにちがいない」といったものに修正されるべきである。つまり，スミスがそういった文言を示している議論の脈絡は，諸国民の富 (wealth) ということに，「安価さと豊富さ」('cheapness and plenty') ということに，かかわっており，「安価」とは，明らかに，低い「真実価格」(low 'real price')——K.E.ボウルディング (K.E. Boulding) が用いた術語でいえば「低い人時価格」('low man-time price')[4]——ということを意味しているのであり，そしてスミスのばあい，生産性——われわれはこんにち生産性について語り合うのであるが，その生産性とは，人時価格と表裏の関係にあるものにすぎないのであり，ボウルディングの表現でいえばそれは，人時の諸商品への変換係数 (the coefficient of transformation of man-time into commodities) にあたるものである——における諸変化が，真実価格につまりある特定の商品を生産するのに必要とされる「労苦と骨折り」に，反映されるということになっているのである。[5]

③　また，スミスの議論の脈絡では，富の増進，すなわち，われわれの欲求が満たされるその程度の向上は，配分プロセスの効率の向上によりもむしろ生産性の向上に，安価さの増進に依存する，とみられているのである。[6]

④　そして，生産の増進に関心をいだきまた集成的な生産物合計を測定することの諸困難に直面したスミスは，彼の注意を，真実価格における諸変化，安価さの程度の諸変化，すなわち，特定諸商品に影響を及ぼすものとしての生産性における諸変化の測定ということに，向けたのであり，そしてその場合注意しておくべきことは，スミスは，たとえある特定時点でのある商品の真実価格といったものは測定されえないとしても，その真実価格の経時的な諸変化は，少なくともおおよそのところでは，測定されうるであろうと考えていた，ということである。スミスは，生産性における重要な諸改良を確かめることができるような，諸変化のなんらかのおおよ

その指標 (index) を，欲したのである。スミスは，諸真実価格における差異を伴った諸変化が市場での諸価格――諸自然価格すなわち諸均衡価格といったものをも含めて――に及ぼす影響といったことに関心をいだいていたのではなく，向上する生産性そしてその結果として生じる富の増進ということに，関心をいだいていたのである。[7]

⑤　さらにまたつぎの点にも留意しておくべきである。すなわち，真実価格つまり人時価格の観点からのスミスのこういった議論は，労働がなんらかの特別な意味で「生産的」なものであるのでありそれゆえ土地や機械類の果たす貢献といったものは無視されることができ，また，労働の「その労働の全生産物」にたいする請求権といったことが確証されうるというような示唆をなんら伴うものではない，ということである。そしてまた明らかに，労働の生産性は，環境の質や労働が自由に使用できる資本設備の量と質といったものに依存するものとみられていたのである。[8]

II〔つづいてブレイドゥンは，スミスの「労働にたいする支配力」という概念について従来なされてきたと彼が考えるいくつかの解釈を取り上げ，それらの解釈に関して，Ⅰでみた彼の基本的な認識にもとづきつつ，以下のような議論を展開する。〕

（1.　まずブレイドゥンは，スミスの議論における「労働にたいする支配力」という概念に関してスミスはそれによって諸商品にたいする購買力を間接的な形で測定しようとしたのだとする解釈が存在してきたとみ，そしてそのような解釈に対して，「労働支配力あるいは購買力」**(Labour Command or Purchasing Power)** という表題のもとに以下のような内容の所説を展開する。）：

①　すでに見たように，スミスは，人は「自分が支配できるその労働〔すなわち，他の人々の労働〕の量におうじて，富んでいたり貧しかったりするにちがいない」と述べたのであるが，この文言は，たとえば，J.A.シュムペーター (J. A. Schumpeter) やS.ホランダー (S. Hollander) の解釈にみられるように当今の多くの論者によって，諸商品に対する購買力を測定

する一つの間接的な方法を示すものとして解釈されてきた。[9] しかしながらこういった解釈は誤ったものである。すなわち，その解釈は，そのような文言が述べられているスミスの議論の脈絡を，人々が市場において財貨を交換しているプロセスというよりもむしろ人々が仕事をしているとともに他人の仕事を支配しているプロセスとしての経済プロセスについての叙述という議論の脈絡を，理解していないのであり，スミスがその議論で問題としているのは「労働支配力」であって諸商品にたいする「購買力」ではないのである。[10]

② なお，こういったスミスの議論は，われわれの言う「実質所得」(real income) という概念に関係するのであるが，諸価格の不安定性，物価指数についての情報等々といったことからわれわれは，当該貨幣所得でもって購買されうる財およびサービスの総計としての実質所得という考えに慣れ親しんできている。なお，たとえばミルクのクォート数と牛肉のポンド数さらに医療サービスの時間数とを足し加えて一つの値に合計するといったことはできないのであるから，当該貨幣所得でもって購買されうる財およびサービスの総計といったものは，厳密には，測定できないのではあるが，それでも，「恒常ドル」('constant dollars') のタームでの所得の諸変化を確証するために物価指数を使用するという工夫は，そのような測定不可能な量における諸変化についてのある有用な指標 (indication) を提供する。だが，人は，貨幣のベールから下にさらに深く，財およびサービスというこの実質所得から下にさらに深く進むことができる，そして，そういったことをなすさいに人がとるかもしれない別個な二つの方向がある。一つは「労働にたいする支配力」というものに導くスミスによってとられた方向であり，もう一つのものは，効用論者たちによって示唆されるものであって，それは，「心理所得」('psychic income') という考えに――すなわち，財およびサービスの厳密には測定不可能なあの量がもつ測定不可能な効用というものに――導くのである。[11]

(2. つぎにブレイドゥンは，スミスの議論における「労働にたいする

支配力」という概念に関してスミスはそれによって社会的産出高を測定しようとしたのだとする解釈が存在してきたとみ，そしてそのような解釈に対して，「労働支配力と社会的産出高の測定」**(Labour Command and the Measurement of Social Output)** という表題のもとに以下のような内容の所説を展開する。）：

① スミスについての一つのヨリ重大な誤解は，うえで取り上げられたような諸商品にたいする購買力の一間接的尺度としての労働支配力といった見解を，個人のあるいは個人集団の所得にではなく総社会的所得，国民分配分，GNP といったものに適用する人々のなかに見いだされる。[12]

② たとえばW. J. バーバー (W. J. Barber)[13] は，スミスは「長期にわたる集計的経済変動を測定するための一つの基礎をあたえることはできると考えていた。市場価格はあまりにも気まぐれなものであって産出高の異時点間の変化を測定するためには満足のいくものではなかったのではあるが……」と述べ[14]，さらに，「一見したところでは，『労働にたいする支配力』というスミスの考案は，こうした指数問題に一つの解答を提供するかのようにみえた。それは，総産出高をそれが購買しうる労働単位数のタームで表すことによって二時点間の総産出高の変化についての比較陳述が可能になるということを，暗に意味していた。一次接近としては，そのような労働単位数のタームでの表現は，貨幣タームで表されている総産出高を基準賃金で割ることによって得られるであろう」としている。[15] だが，(i)スミスは，特定諸産業における生産性の向上をすなわち特定諸商品の進展する安価さ（したがってまた豊富さ）を測定することに，関心をいだいていたのであって，一つの全体としての生産性といったものを測定することを試みていたわけでも，総産出高の大きさを測定することを試みていたわけでもなかったのである。(ii)また，うえでみたように，特定の人々あるいは諸特定集団の実質所得の一尺度としては，「労働にたいする支配力」というものは意味をなすのではあるが，総産出高の一尺度としては，それはなんの意味をもなさないのであり，また，スミスはそれを用いたわけではなかっ

たのである。すなわち，一つの全体としての社会がもつ労働支配力とは，その社会が利用することのできる全労働のことである。いま，もしその社会の労働者数が増加するならば，その社会はヨリ多くの労働を支配し，そして，その社会の人口1人当たり産出高は増加しないかもしれないが，その社会はヨリ多くの産出高を享受する。また，もしその社会の労働者たちがヨリ長い時間数働くならば，その社会はヨリ多くの労働（労働時間数）を支配し，そして1人当たり産出高が増加するにつれて総産出高は増加することとなる。だが，生産性が向上しているときには（そして，スミスが関心をいだいていた状況はこういった状況である），その社会が同一量の労働を支配ししかも総産出高が増加するということも可能なのである。[16] (iii) いま，当該社会に100万の人間〔100万人の労働者〕が存在し，そして，彼らの生産性が2倍になり，そのため総産出高が2倍になるとしよう。だが，どのようにして，産出高が2倍になったというような言葉に意味を与えることができるように様々な諸財貨を計算するのか〔つまり，異なった種類の諸財貨の諸量はそのままでは一つの値に合計することのできないものであるからそれらの諸財貨の諸量そのものの合計としての総産出高といったものは厳密には確定できず，またそれゆえそのようなものとしての総産出高が2倍になったといったことは厳密には確定することはできない。このような問題を克服して，総産出高の確定およびそれの異時点間の比較をなすことができるようにするにはどうすればよいのか〕。バーバーによれば，スミスは，それが支配することのできる労働単位数のタームで総産出高を示すことによって，平均貨幣賃金で割った産出の貨幣での総価格〔産出の貨幣での総価格／平均貨幣賃金〕を示すことによって，それをなした，とされる。いま，生産性における改善がすべての産業の間で均一的であったと仮定しよう。その場合には，スミスは，それらの産業において生産される生産物1単位の真実価格また労働支配力は半減させられることになる，と言うことになるであろう。[17] だがそれでもなおその社会には，みずからの労働が支配されうる人々は100万人しか存在していないのである，したが

って，総産出高の労働支配力は変化してはいないのである。もっとも，その場合，総産出高の貨幣での価格が2倍になっているかもしれず，しかも労働者たちの貨幣賃金は変化していないかもしれない。そしてそういった事情は，平均賃金で割った総産出高によって測られるものとしての産出高が2倍になったのだから労働支配力は2倍になったということを意味しているかのようにみえるかもしれないであろう。だが，そういった事情が本当に意味していることは，資本家，不労所得生活者たちの労働支配力が増加しており，労働者たちの労働支配力が減少している，ということなのであり，したがってまたそれは，マルクス的用語で言えば，搾取の程度，剰余価値の総額にかんしてなんらかのことを語っていることとなる，ただし，その剰余価値に相当する諸財貨の量についてはなにごとをも語ってはいないのである。[18][19]

③　また，(a)R. L. ミーク (R. L. Meek)[20] も，同じように「一国の生産物 (the national product) が購買あるいは支配するであろう労働の量（すなわちその生産物の価値）」ということに言及し，さらにまた，その量は一般に「その生産物の生産に要する労働の量 (the quantity of labour required to produce it)」よりも大きいということを主張し，そして彼は，スミスが「支配しうる労働という概念」を使用したのは，「資本主義のもとでの蓄積という特殊な問題についての分析への彼の関心の産物であるという点がかなり多かったようである」，という考えを提示している。[21] ミークのこういった議論も満足のいくものではない。すなわち，「体化される労働」(labour embodied) と「支配される労働」(labour commanded) という二つの量は同一であるにちがいなく，それらは「利用可能な労働」を指し示す二つの様式にすぎないのである。[22] そして，蓄積の問題とは，資本家階級によって支配される労働の量がどれほどであり，また，その労働が贅沢よりもむしろ蓄積に向けられるか，といったことなのである。(b)さらにまたミークは，「狩猟民族」のケースに言及するさい，10時間の労働は，10時間の労働を支配するであろう産出物を生産するであろう，ということを認

めるのであるが，彼はまた，蓄積以後は「その商品が購買または支配するであろう労働の量はいまや10時間よりも多いであろう」と述べ，そして，その場合には，生産の技術的諸条件は同一のままであったとしても，スミスの意味でのその商品の「価値」は増加したと言われなければならない，としている。[23] だが，蓄積は「技術的諸条件」を変化させているにちがいなく，労働の生産性は向上しているにちがいない，そして10時間の労働はヨリ多くの生産物を生産するということになるであろう，そしてスミスの意味での価値――真実価格（体化されている労働）であろうと真の値うち（支配される労働）であろうと――は，低下しているにちがいないのである。しかしそのさいにはまた，資本家たちの労働支配力が増加していることになり，増加した生産物のうちの彼らの分け前が増加していることになっているであろうし，また，諸生産物の相対的な交換価値は，種々の諸商品の諸生産方法における相対的な改良――費用における相対的な削減――におおよそのところで合致するよう変化していることになっているであろう。[24]

④　また，うえのものと非常によく似ているのが，H.ミント[25]によるこの問題の取り扱いである。すなわちミントはその議論を展開する過程で，「発達した経済においては国民分配分によって『支配される』労働の量は，地代〔および利潤〕の形で支払われる分配分の部分の程度だけ，その国民分配分の生産に『体化された』労働の量を超過するというスミスの命題」[26]ということに言及するのである。だが，スミスはそのようなことを述べたわけではなく，また，そういった命題は無意味なものなのである。すなわち，体化されるべき労働すなわち支配されるべき労働それだけの量の労働が存在するだけなのである。そこにおいて真に問題となることは，〔存在するその労働を〕だれがどれだけ支配するかということなのであり，また，スミスが取り扱っていた問題は，存在するその労働の〔個々の商品生産部門での〕生産性における諸変化をどのようにして測定するか，ということであったのである。[27]

⑤　なお，いくらかの混乱は，労働支配力を，たとえばあなたがそれの

雇用という点ではなんの役割をも演じはしないとしてもあなたがそれの生産物を享受することのできるところの労働の量（それだけの量の労働がどのように雇用されようと）としてよりもむしろ，資本家が雇うことのできる労働の量として，取り扱うことから，生起してきているのであり，また付加的な混乱は，生産的労働と不生産的労働との間の区別から，生起してきている。[28]

（3.　つぎにブレイドゥンは，スミスの議論における「労働にたいする支配力」という概念に関してスミスはそれを価値の決定因という脈絡のなかで論じていたとする解釈が存在してきたとみ，そしてそのような解釈に対して，「労働支配力，価値の決定因それとも価値の尺度」**(Labour Command, Determinant or Measure of Value)** という表題のもとに以下のような内容の所説を展開する。）：

①　P. H. ダグラス (P. H. Douglas)[29] は，スミスの労働価値説には投下労働量による価値の決定と支配労働量による価値の決定という二つの異なった学説が含まれているとするのであるが，[30] これは，「原因」('cause') の意味で「決定するということ」と「測定」('measure') の意味で「決定するということ」とを混同しているものである。[31] さらにまたダグラスは「ウィーザー (F. von Wieser) によっても言われたように労働費用説は原始社会における価値を説明するためのものにすぎなかったのでありそしてスミスが労働支配説を考えだしたのはヨリ進歩した社会で価値がどのようにして定められるかということを説明するためであった，ということが時おり言われる」と述べるのであるが，[32] ここでは，ダグラス（そしてまたウィーザー）は[33]『国富論』第1篇第7章での価値の生産費説 (the cost-of-production theory of value) の提示を無視しておりさらにまた真実価格の一尺度としての労働支配力の使用ということを正しく理解していない，ように思えるのである。シュムペーターも，こういった解釈は誤ったものであるということをはっきり知覚しており，「商品の価値の説明としてその商品と交換されるもの……を用いるということは，〔価値〕理論の歴史における

最悪のあやまちの一つであろう」としている。[34] 事実スミスはこういったあやまちをおかしてはいなかったのである。[35]

② リカードウは，この誤りすなわち価値の尺度と原因との混同という誤りをあやうくおかすところであった，だが，ゴンナーが彼を免罪している[36]のは正しいと思える。とはいえ，リカードウが，スミスは「なんらかの対象物の生産に投下された労働量 (the quantity of labour bestowed on the production of any object)」と「それが市場において支配しうる労働量」とを「同じことを表すもの」として取り扱った，と述べたとき，[37] リカードウは事実，論点を混乱させていたのである。スミスはそれらのものがどんなに異なるものであるかということを知っていたのである，しかしまた彼は，後者における諸変化は前者における諸変化の一指標を提供することができようと考えたのである。また，リカードウがそれにつづけて，〔スミスは〕「ある人の労働が2倍の能率をもつようになったまたそれゆえ彼が一商品の2倍量を生産することができるといったことのゆえに，彼は必然的に労働と交換に以前の2倍量を受け取るであろう，かのように」〔論じた〕，と述べたとき，[38] リカードウはスミスをさらにいっそう誤り伝えていたのである。スミスはそんなことを主張しはしなかったのである。スミスが言ったことは，真実価格が半減させられているであろうということ，そして，その商品の労働支配力はおおよそ半減させられるであろうということ，であったのであり，スミスは，生産性のそのような向上が実質賃金にあるいは平均的労働者の労働支配力に及ぼす効果といったことそのものについては何も述べはしなかったのである。[39]

（注）

(1) 本稿では，V〔incent〕W. Bladen, "Command over Labour: A Study in Misinterpretation," in *Adam Smith: Critical Assessments,* ed. John Cunningham Wood, 4 vols. (London & Canberra: Croom Helm, 1983-1984), vol. 3 (1983) 〔Source: *Canadian Journal of Economics,* vol. 8 (no. 4, November-December 1975), pp. 504-519.〕のなかで示されているブレイドゥンの所論をみる。なお，

本稿では上掲書所収の上掲論文を取り扱うのであるが，ブレイドゥンのこの研究の発表年度の区分についてはもともとその論文が公表された年度，1975年を記しておいた。そして以下では，上掲書中のブレイドゥンのこの論文を，Bladen〔1975〕と略記することとする。

(2) ブレイドゥンは，経済プロセスを人々が仕事をしているとともに他人の仕事を支配しているプロセスとみなすこういった見方は，経済学の古典期の冒頭でのスミスの労作のなかにまた古典期の終わりでのマルクスの労作のなかにとくにはっきりとあらわれている，とし，その例として，スミスの『国富論草稿』からつぎのような文章を引用している。「いつでも自分自身の目的のために，多くの人の労働 (labour) を指図しうる者が，自分自身の勤労 (industry) だけにたよっている者よりも，自分の必要とするあらゆるものを，よりよく調達できるということは，きわめて容易に想像しうるところである。……文明社会 (Civilized Society) においては，貧乏人は自ら調達するとともに支配階級 (Superiors) の莫大な奢侈にたいしても供給するのである。……10万家族〔ブレイドゥンの論文では100家族として引用されているが，『国富論草稿』の原文では10万家族〕の社会には，全然労働しない100家族が，おそらく存在していて，彼らは，暴力あるいはそれよりおだやかな (orderly) 法律の圧力によって，その社会にいる他のいかなる1万家族が使用するよりも多くの，その社会の労働を使用している (employ) のである」（William Robert Scott, *Adam Smith as Student and Professor, with Unpublished Documents, Including Parts of the "Edinburgh Lectures," a Draft of "The Wealth of Nations," Extracts from the Muniments of the University of Glasgow and Correspondence,* Glasgow University Publications 46 〈Glasgow: Jackson, 1937; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley·Publisher, 1965〉, pp. 326-327. 水田洋訳『国富論草稿』〈日本評論社，1948年〉，46－51ページ。〔　〕内は中川。）。

そしてブレイドゥンによれば，うえの引用文においては「使用している」(employ) という言葉は，企業家として賃金を支払っているといったことを言おうとしているのではなく，そういった労働の使用 (employment) がどんなふうに組織されていようともとにかくその労働の生産物を享受しているということを言おうとしている，ということは明らかなことであるように思えるのであり，そしてこういった考えは，マルクスにおける搾取の理論に，すなわち，労働者たちは彼らの時間の一部を生活資料の生産に費やし（「必要労働時間」），そして彼らの時間の残りの部分を，資本家階級のための――たんに，実際に賃金稼得者たちを雇いそして彼らの生産的諸活動を組織する階級の構成員たちのための，というわけではない――剰余価値の生産に費やすといった理論に，関連づけられるものである，とされる。Bladen〔1975〕, p. 364.

(3) Bladen〔1975〕, p. 364.

(4) ブレイドゥンは，ボウルディングがこのような術語を用いている箇所として，Kenneth E. Boulding, "Equilibrium and Wealth: A Word of Encouragement to Economists," *Canadian Journal of Economics and Political Science,* vol. 5 (no. 1, February 1939), pp. 1-18——以下，Boulding〔1939〕と略記する——中の pp. 9-12 をあげている。Bladen〔1975〕, p. 364.

(5) Bladen〔1975〕, p. 364.

(6) Bladen〔1975〕, pp. 364-365. このことに関してブレイドゥンはつぎのような説明を加えている。すなわち，スミスは『国富論』第1篇第7章において，供給がみずからを有効需要に適合させる配分プロセスについてのある非常に満足のいく説明を与え，そしてそれによって，企業活動の自由にたいする彼の弁護の諸支えの一つを提供したのであるが，彼をしてそのような自由を弁護するよう主に動機づけていたものは，自由というものが生産性に及ぼす好ましい効果ということであったのである。またこのことは，ミント (H. Myint) も述べているように（Hla Myint, *Theories of Welfare Economics* 〈London: Longmans, Green & Co.; Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1948; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley, Bookseller, 1965〉——以下，Myint〔1948〕と略記する——，pp. 3-4.），自由な交易にたいするスミスの弁護といったことにもあてはまるのであり，その場合スミスは，配分構造の「強化」ということよりも，「拡張」プロセスにすなわち「ヨリ良好な分業をもたらすところの市場の範囲の拡大」ということに，ヨリ多くの関心をいだいていたのである。Bladen〔1975〕, p. 365.

(7) Bladen〔1975〕, p. 365.

(8) Bladen〔1975〕, p. 365. このことに関連してブレイドゥンはさらにつぎのような説明を加えている。すなわち，ボウルディングは，人時 (man-time) を一つの本源的等質的資源とみなすことは，協働する土地あるいは協働する諸要素の稀少度の影響といったものは諸変換係数のなかに完全に反映されうると考えることを，妨げるものではない，「人が多量の良好な土地と設備と協働しているとき，あるいは彼の熟練，精力および才能が高度なものであるときには，人時の生産物への変換係数は大きい，つまり，1人時 (one man-hour) はある大きな量の財およびサービスを生産するであろう」と述べているが〔Boulding〔1939〕, p. 10 を参照せよ。〕，この立場がスミスの立場なのである。彼は，「あらゆる特定の国民にたいする年々の供給の豊かさあるいは乏しさ」に影響を与えるものとして「その国民の領土の地味，気候あるいは広さ」ということに言及したし，特定諸商品を生産するのに必要とされる労働を「促進し，短縮する」諸機械に言及したし，また，蓄積の重要性を強調したのであった。Bladen〔1975〕, p. 365.

(9) ブレイドゥンは，シュムペーターおよびホランダーがこのような解釈を示している例として，つぎのような引用文を提示している。「スミスは，地域間の比較

ならびに異時点間の比較という目的のために，この貨幣価格または名目価格に代えて，われわれが貨幣賃金とは区別されるものとしての実質賃金について語るのと同じ意味での実質価格 (real price) を，すなわち，あらゆる他の諸商品のタームでの価格を，もちだしてくる。……彼は，彼の時代にすでに発明されていた指数方法を知らなかったので，諸実質価格をさらに転じて，労働のタームでの諸価格に置き代える……。……彼はニュメレールとして，銀や金の代わりに，労働を選び出すのである」〔Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis,* edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter〈New York: Oxford University Press, 1954〉——以下，Schumpeter〔1954〕と略記する——，p. 188（東畑精一訳『経済分析の歴史』〈全7冊〉〈岩波書店，1955－1962年〉，第1分冊〈1955年〉，392ページ）を参照せよ。なお，以上の引用文ではシュムペーターの原文中の数箇所がことわりなしに省略されたり変更されたりしているのであるが，ここではブレイドゥンの提示しているそのままの引用文を示しておくこととした。〕。「一商品によって支配される労働がその商品の一般的購買力の指標を提供する。……『真実価値』('real value') は，こうして，消費財にたいする購買力にあてはまり，他方，労働にたいする支配力はそのための間接的手段として役立つ」〔Samuel Hollander, *The Economics of Adam Smith*〈Toronto: University of Toronto Press, 1973〉——以下，Hollander〔1973〕と略記する——，pp. 127-128（小林昇監修，大野忠男，岡田純一，加藤一夫，斎藤謹造，杉山忠平訳『アダム・スミスの経済学』〈東洋経済新報社，1976年〉，180ページ）を参照せよ。〕。「『真実価値』の支配労働指標の選択は，……諸商品にたいする購買力の間接的尺度たることが，意図されていた」〔Hollander〔1973〕, p. 135（邦訳，188ページ）を参照せよ。〕。Bladen〔1975〕, p. 366.

(10) Bladen〔1975〕, pp. 366-367. ブレイドゥンによれば，そのようなものとして解釈されるべきスミスの立場は後代のA. マーシャル (A. Marshall) やJ. M. ケインズ (J. M. Keynes) の議論のなかにも見いだされるのであり，彼らは延べ払い (deferred payments) の適当な標準ということに関連して，諸商品にたいする購買力ではなく労働にたいする購買力（支配力）を用いて議論を展開しようとしている，とされる。詳しくは Bladen〔1975〕, pp. 366-367 を見よ。

なお，上記ページのある箇所においてブレイドゥンは，貨幣の安定的な「労働支配力」ということは生産性の向上につれての諸価格の低下を意味するであろうということをマーシャルは認知していたのであり，また，技術進歩が生じている期間での諸個人所得の変動する労働支配力というものは「諸商品にたいする購買力の間接的な尺度」ではないということをマーシャルは十分に理解していた，とし，そして，そのような期間においては安定的な購買力とは低下する労働支配力ということを，また，安定的な労働支配力とは低下する諸価格を，意味するだろ

う，といった指摘をなしている。スミスの議論における生産性の向上ということの重要性を強調するブレイドゥンはおそらくそこではつぎのような状況のことを言っているのであろう。すなわち，技術進歩等によって生産性の向上がある場合に，その生産性向上の結果，諸商品価格が安定的にとどまったままで貨幣賃金が上昇するようなことがあれば（↔商品タームでの賃金の上昇），「貨幣の商品購買力」が安定的なままで「貨幣の労働支配力」は低下することになり，個人がもつある一定額の貨幣（個人の〔貨幣〕所得）の商品購買力が安定的なままでその一定額の貨幣の労働支配力は低下することとなり，したがってこの場合には，個人の所得の労働支配力は，その個人の所得の商品購買力を反映することはできないということになる。同様に，その生産性向上の結果，諸商品価格が低下するが貨幣賃金は安定的にとどまるようなことがあれば（↔商品タームでの賃金の上昇），貨幣の労働支配力は安定的なままで貨幣の商品購買力は上昇することになり，個人がもつある一定額の貨幣の労働支配力が安定的なままでその一定額の貨幣の商品購買力は上昇することとなり，この場合にも，個人の所得の労働支配力は，その個人の所得の商品購買力を反映することはできない，ということになる。

なお，ホランダーによれば，スミスのいう「真実価値」('real value') という用語には，消費財にたいする購買力としての「真実価値」とともに，生産の努力費用 (effort cost of production) という点からの支配労働〔つまり，労働不効用にたいする支配力という意味での支配労働〕としての「真実価値」，具体的にはたとえば国民所得に対応する努力という相対物に相応するところの不効用といったようなもの〔つまり，国民所得の，労働不効用にたいする支配力，といったようなもの〕としての「真実価値」という二つの含意がある，とされ，そしてスミスの議論では「支配される労働」(labour commanded) は，前者の意味での「真実価値」の指標，間接的尺度とされているとともに後者の意味での「真実価値」の尺度ともされている，とされるのであるが，そのさいホランダーは，前者の意味での「真実価値」の指標，間接的尺度としての「支配される労働」に関して，労働生産性の継続的上昇が実質購買力についてのこの「支配される労働」という指標，間接的尺度を全面的に不適切なものにしてしまうことはなかろうとスミスはみていた，とするのであった。(Hollander〔1973〕, pp. 127-128, 132, 135-136. 邦訳，179－181ページ，184ページ，188ページ。拙稿「『アダム・スミスの価値尺度論』に関連するS.ホランダーの所論（1973年）――『アダム・スミスの価値尺度論』についての海外における諸研究(15)：1970年代（その4）――」(『広島経済大学経済研究論集』第10巻第2号，1987年6月)，2－3ページ，5－6ページ注5－10，13ページの注15の一部，13－14ページも見よ。)

(11) Bladen〔1975〕, p. 367. さらにブレイドゥンはつぎのような説明を加えている。すなわち，たしかにそういったものは測定不可能なものではあるがそれに関連し

ていくつかの常識的な主張を形成することはできるのであって，ヴェブレン的な考え方にそって，つぎのように主張することもできるであろう。つまり，どんな個人のあるいはどんな個人集団の心理所得も，他の諸個人あるいは諸個人集団の実質所得が上昇しているのにその個人のあるいはその個人集団の実質所得が一定にとどまるときには，低下する，ということである。そしてこれが，実質賃金は上昇してきたけれども「相的的窮乏化」〔なお，ブレイドゥンは 'relative immiserization' という用語を使用している〕が進行してきたというマルキストたちの主張にとっての根拠となるものであり，またこれは，ケインズの「労働標準」の「公正さ」を主張するための一根拠となりうるかもしれないのであり，さらにそれは，所得の労働支配力というものへのスミスの関心を正しく理解するための助けとなりうるかもしれないのである。Bladen〔1975〕, pp. 367-368.

(12) Bladen〔1975〕, p. 368.

(13) William J. Barber, *A History of Economic Thought* (Harmondsworth, Middlesex, England: Penguin Books, 1967; reprinted 1970)——以下，Barber〔1967〕と略記する——．稲毛満春，大西高明訳『経済思想史入門』（至誠堂，1973年）。

(14) Barber〔1967〕, p. 31（邦訳，35－36ページ）を参照せよ。

(15) Barber〔1967〕, p. 34（邦訳，39ページ）を参照せよ。

(16) ブレイドゥンによれば，生産性が向上する場合におけるこういった事情についての考慮は，『経済学および課税の原理』第20章「価値と富 (Value and Riches), それらの特性」におけるリカードウ (D. Ricardo) の主張——「製造業における100万の人の労働は，つねに同一の価値 (value) を生産するであろう，しかし必ずしもつねに同一の富 (riches) を生産しないであろう。機械の発明，熟練の向上，よりよい分業，あるいはより有利な交換がなされうる新市場の発見によって，一つの社会状態において，100万の人は，彼らがある他の状態において生産しうるであろう富 (riches) の，すなわち，『必需品，便益品，および娯楽品』の，2倍または3倍の量を生産するかもしれない，しかしそれだからといって，彼らは価値 (value) にすこしも付加しないであろう」(David Ricardo, *Principles of Political Economy and Taxation,* edited, with Introductory Essay, Notes and Appendices, by E. C. K. Gonner (London: G. Bell & Sons, 1927)——以下，Ricardo, *Principles*〔Gonner ed.〕と略記する，ただし，ブレイドゥン自身はゴンナー (E. C. K. Gonner) 編のもとの1891年のものを使用している——，p. 258.〈David Ricardo, *The Works and Correspondence of David Ricardo,* ed. Piero Sraffa, vol. 1: *On the Principles of Political Economy and Taxation* (Cambridge: Cambridge University Press, 1951)——以下，Ricardo, *Principles*〔Sraffa ed.〕と略記する——，p. 273. P．スラッファ編『デイヴィド・リカードウ全集』第1巻：堀経夫訳『経済学および課税の原理』（雄松堂書店，1972年），315ページ。〉）——の背後にある常識である，

とされる。なおまたブレイドゥンによれば，リカードウの場合そこでいわれている「価値」('value') とは「体化されている労働の量」(the 'quantity of labour embodied') である，だが，もし人がある所与の量の体化されている労働の，生産物を享受するならば，その人は同じように，それだけの量の労働を支配していたまたその結果として生ずべき「富」('riches') を享受していたのだと言われてもよい，とされる。Bladen〔1975〕, pp. 368-369.

(17) この後者の点については，後述の本稿Ⅱ.(3).②，次稿の注47を参照せよ。

(18) ブレイドゥンがここで言っていることはつぎのようなものとして理解できよう。すなわち，ブレイドゥンによれば，一社会の労働支配力，一社会の総産出高の労働支配力とは，その社会が利用することのできる全労働量，その社会に存在する全労働量のことであって，社会に存在するこの全労働量が一定であれば，財貨そのものの産出高が変化したとしても，その社会の労働支配力，その社会の変化した総産出高の労働支配力は一定のままなのであり，また逆に，社会に存在するその全労働量が増加（減少）すれば，その社会の財貨そのものの総産出高とは関係なしに，その社会の労働支配力，その社会の総産出高の労働支配力は増加（減少）することとなる。したがってまた，産出の貨幣での総価格を平均貨幣賃金で割って当該社会の総産出高が支配しうる労働量をみるといったことは，もともとなんの意味をもなさない，ということになる。さて，いま，当該社会に存在する労働量および貨幣賃金が一定のままで，社会の総産出物の貨幣での価格が2倍になった，としよう。このような事態においては，バーバーの示す公式によれば平均貨幣賃金で割った産出の貨幣での総価格によって示されるものとしての総産出高は2倍になり，労働支配力は2倍になったということになる。だが，本当のところは，存在する労働量が一定なのだから，社会の労働支配力，社会の総産出高の労働支配力も一定のままなのである。このような事態が真に意味していることはつぎのようなことなのである。いま社会の構成員を労働者と資本家・不労所得生活者とからなるものとする。とすると，この二つのグループのうち，労働者グループについていえば，貨幣賃金および存在する労働量が一定のままであるのであるからそのグループが受け取る貨幣での分け前は一定のままであり，貨幣での総産出高が2倍になることによって貨幣での分け前が増加するグループがあるとすれば，それは資本家・不労所得生活者グループということになる。そしていま，そのグループの受け取る貨幣での分け前が，事実，増加したとする。とすると，存在する労働量が一定のもとで，労働者グループの受け取る貨幣での分け前が一定のままで資本家・不労所得生活者グループの受け取る貨幣での分け前が増加するのであるから，それに対応して，資本家・不労所得生活者グループの労働支配力が増加し，労働者グループの労働支配力は減少する，ということになる。そしてこういったことは，マルクス的用語で言えば，搾取の程度〔搾取度……剰余価

値率＝（剰余価値）／（可変資本）；ここでの例では，（資本家・不労所得生活者グループの受け取る貨幣での分け前）／（労働者グループの受け取る貨幣での分け前），に対応〕，剰余価値の総額〔ここでの例では，資本家・不労所得生活者グループの受け取る貨幣での分け前に対応〕にかんしてはなんらかのことを語ってはいるが，その剰余価値に相当する諸財貨の量そのものについてはなにごとをも語ってはいないのである。

(19) Bladen〔1975〕, pp. 368-369.

(20) Ronald L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value,* 2nd ed. (London: Lawrence & Wishart, 1973; 1st ed., 1956)——以下，Meek〔1956〕と略記する，ただし，ブレイドゥン自身は1956年の初版を使用している——．水田洋，宮本義男訳『労働価値論史研究』〈初版の訳〉（日本評論新社，1957年）。

(21) Meek〔1956〕, p. 66（邦訳，75ページ）を参照せよ。

(22) ブレイドゥンによれば，本稿注16でみたように，人がある所与の量の体化されている労働の，生産物を享受するときその人はそれだけの量の労働を支配していたまたその結果として生ずべき「富」を享受していたのだと言われてもよい，とされ，そしてまたブレイドゥンによれば，一国全体としてみる場合，一国の生産物そのものの量にはかかわりなく，その国に実際に存在する労働の量・その国が全体として利用できる労働の量が，その国が全体として「支配しうる労働」の量，その国の一国の生産物の生産に投入される労働の量なのであり，一国が全体として「支配しうる労働」の量であるその国に実際に存在する利用可能な労働量が生産に投入されることによって，その国はそれだけの量の労働が「体化されている」生産物を享受することになる，とみられるのである。

なお，ミークの場合には，当該商品の売り上げで買いうる他の商品のなかに体化されている過去の労働の量〔この脈絡では，当該商品の売り上げで他の商品を買いうるということは，他のその商品のなかに体化されているだけの量の過去の労働を支配しうる，ということとなる〕と当該商品の売り上げで雇いうる現在の労働の量とが問題にされ，そしてミークは，スミスのいう「支配しうる労働の量」とは後者の労働量のことであって，そしてまたスミスは一国の生産物が支配しうる〔現在の〕労働量がその一国の生産物を生産するのに要した労働量を超えるその大きさ，その差が，その国がつぎの生産期間に行いうる蓄積額の尺度となると考えた，とみるのであった。（Meek〔1956〕, pp. 63-64, 64n. 1, 65-66, 66n. 2〈邦訳，71－72ページ，71－72ページ注1，73－75ページ，74ページ注2〉を見よ。拙稿「『アダム・スミスの価値尺度論』についての海外における諸研究(5)——1950年代（その1）——」『広島経済大学経済研究論集』第5巻第2号，1982年6月，117－118ページ，125－126ページ注13，126－127ページ注14も見よ。）

(23) Meek〔1956〕, p. 79（邦訳，90－91ページ）を参照せよ。

(24) Bladen〔1975〕, p. 369.

(25) Myint〔1948〕.

(26) Myint〔1948〕, pp. 20-21 を参照せよ。〔　〕内は，前掲書前掲ページ中のミントの文言を引用するにさいしてブレイドゥンが抜かしている部分。

(27) Bladen〔1975〕, pp. 369-370. なお，ブレイドゥンはこのことに関して，ミントの算術例を用いつつ，つぎのような説明をなしている。すなわち，ミントは，国民分配分が1,000単位の労働を「支配」し，そして，その国民分配分は，一般的な賃金財のタームで1,000単位の産出物からなっている，と仮定し，そして，それら1,000単位の財貨のうち600単位は賃金として支払われ，200単位は地代として200単位は利潤として支払われる，とする。そして，ミントは，スミスにしたがえば，1,000賃金単位のその時の社会的産出高はいま1,000単位の労働を支配するのではあるけれどもこの1,000賃金単位の社会的産出高は，ただ600単位だけの「体化された」労働の生産物である，と言う。〔Myint〔1948〕, p. 21 を参照せよ。〕だが，そのような学説をスミスのものと判断することを正当とするための根拠を見いだすことはできない。ここでは，ただ1,000単位だけの支配されるべきすなわち体化されるべき労働が存在するのであり，それだけの単位数の労働のうち，この例では労働者たちは600単位を支配し，地主たちと資本家たちとで400単位を支配するのであり，そして，そのなかに労働が体化される諸財貨のうちの3/5を労働者たちが，2/5を「有産者たち」が，享受するのである。そしてまた，スミスが取り扱っていた問題は，それら1,000単位の労働の〔個々の商品生産部門での〕生産性における諸変化をどのようにして測定するか，ということであったのである。Bladen〔1975〕, p. 370.

(28) Bladen〔1975〕, p. 370.

(29) Paul H. Douglas, "Smith's Theory of Value and Distribution," in *Adam Smith, 1776-1926: Lectures to Commemorate the Sesquicentennial of the Publication of "The Wealth of Nations,"* by John Maurice Clark and others (Chicago: University of Chicago Press, 1928; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley・Publishers, 1966)〔originally in *University Journal of Business* (Chicago), vol. 5 (no. 1, January 1927), also in *The Development of Economic Thought: Great Economists in Perspective,* ed. Henry William Spiegel (New York: John Wiley & Sons; London: Chapman & Hall, 1952).〕――以下，Douglas〔1927〕と略記する――．越村信三郎訳「スミス論」〔H. W. スピーゲル編，越村信三郎その他監訳『古典学派――経済思想発展史II――』(東洋経済新報社，1954年）所収〕。

(30) ここではブレイドゥンはダグラスのつぎのような文章を引用している。「われわれは，これまでのところスミスの労働価値説について，あたかもそれが一元的なものであるかのように述べてきた。しかし事実上，そのなかには，労働凝固説

あるいは労働費用説 (the labor-jelly or labor-cost theory) と労働支配説 (the labor-command theory) という非常に異なった輪郭をもつ二つの学説がふくまれているのである。……労働凝固説では，一物の価値は，その生産に必要とされる労働単位の量によって決定されるというように説明され，これに反して労働支配説では，一物の価値は，それでもって購買されうる労働の分量によって決定されるというふうに説明されるのである。」(Douglas〔1927〕, p. 88. 邦訳, 16－17ページ。) Bladen〔1975〕, p. 370.

(31) この脈絡のなかでブレイドゥンはJ.S.ミル (J. S. Mill) のつぎのような文言を引用している。「『価値の尺度』(a Measure of Value) という観念は，価値の規制者もしくは決定原理という観念と混同されてはならない。……これら二つの観念を混同することは，温度計と火とのあいだの違いを見落とすのとほとんど同じようなことであろう。」〔John Stuart Mill, *Principles of Political Economy: With Some of their Applications to Social Philosophy,* new impression, edited with an Introduction by W. J. Ashley (London: Longmans, Green & Co., 1926――ただし，ブレイドゥン自身はアシュリー (W. J. Ashley) 編のもとの1909年のものを使用している――), p. 568. 末永茂喜訳『ミル経済学原理』(全5冊) (岩波文庫，岩波書店，1959－1963年)，第3分冊 (1960年)，251－252ページ。〕Bladen〔1975〕, p. 370.

(32) Douglas〔1927〕, p. 89 (邦訳，19ページ) を参照せよ。

(33) なお，ダグラス自身は，いま本文でみた彼の文言につづけて，「これは部分的にのみ真理である。労働費用説はこの原始的な社会段階に適用されたが，それはまた同じように，時として，さらに現代的な社会にも適用されたのである」としている。Douglas〔1927〕, p. 90. 邦訳，19ページ。

(34) Schumpeter〔1954〕, p. 310 (邦訳，第2分冊〈1956年〉，651ページ) を参照せよ。本文中の「　」内の文言のうち傍点の付されている部分はシュムペーターの上記原典上記ページ中の該当部分においてイタリック体で示されている箇所，〔　〕内は上記邦訳書上記ページ中の該当部分においてその邦訳者によって挿入されているものであり，ここでもそれを挿入しておいた。

(35) Bladen〔1975〕, pp. 370-371.

(36) ブレイドゥンは，このことを示すものとして，ゴンナーが編集したリカードウの『経済学および課税の原理』に付されているゴンナーによる一脚注をあげている。Bladen〔1975〕, p. 371. そこではゴンナーは，「人間の勤労によって増加させられえない物を除外するかぎり，これ〔労働〕が実際にすべての物の交換価値 (exchangeable value) の根底 (foundation) である，ということは，経済学におけるもっとも重要な学説である」というリカードウの文言 (Ricardo, *Principles* 〔Gonner ed.〕 pp. 7-8. 〈Ricardo, *Principles* 〔Sraffa ed.〕, p. 13. 邦訳，15ページ。〉

引用文中の〔　〕内は上記邦訳書においてその邦訳者によって挿入されているものであり，ここでもそれに従った。）に脚注を付してつぎのように述べている。「価値の尺度と原因との混同という失敗が時としてリカードウに帰されてきたし（たとえば，Sidgwick, *Principles of Political Economy,* first edition, p. 10），またたしかに彼の言葉づかいは時々そのような混同を連想させるものであったかもしれない。だが，私が思うに，彼はそのような失敗には陥りはしなかった。いずれにせよ，せいぜいのところ，そのような混同は，交換価値 (exchangeable value) に関連するものであったのであろう。しかしこの関連においてさえ彼ははっきりと，効用は交換価値の尺度ではないけれども交換価値にとって絶対に欠くことのできないものであると言っているのである。しかしこの点についての詳細な議論については，本書序文 (Introduction) を見よ。」(Ricardo, *Principles*〔Gonner ed.〕, p. 8n. 1.)

(37) Ricardo, *Principles*〔Gonner ed.〕, p. 8（Ricardo, *Principles*〔Sraffa ed.〕, p. 14. 邦訳，16ページ。）を参照せよ。

(38) Ricardo, *Principles*〔Gonner ed.〕, p. 8（Ricardo, *Principles*〔Sraffa ed.〕, p. 14. 邦訳，16ページ。）を参照せよ。

(39) Bladen〔1975〕, p. 371. なお，ブレイドゥンはつぎのような説明を加えている。すなわち，商品の労働支配力における変化は真実価格（生産性，費用）における変化におおよそ比例するであろうとしても，社会における諸個人の労働支配力は不均等に変化することであろう。たとえば，もしその改善が賃金財に影響を及ぼしたとすれば，さらにもし賃金が生存費水準のままにとどまったとすれば，実質賃金は不変のままにとどまり，平均的労働者の労働支配力は低下する，ということになるであろう。これはマルクスの「相対的剰余価値」のケースである。スミスは，労働者たちが前進的社会においては生産性向上の恩恵のうちのいくらかを享受するものと考えていたように思える。ただしスミスは疑いなく，その恩恵がすべてあるいは主に労働者たちのうえに生じるといったようなことはほのめかしはしなかったのである。Bladen〔1975〕, p. 371.

〔以下，次稿〕